

秋も深まりつつあるこの時期になると、紅葉前線が発表になります。春の桜前線とは違い、気温の下がる北海道から始まり南下するのがこの前線です。

この紅葉前線を目安に観光をするのも秋の風物詩のひとつでしょう。関東では、日光のいろは坂をはじめ各地の山間部を中心に紅葉し、都市部では欒や銀杏並木も秋に彩りを添えます。

紅葉と書いて紅葉（こうよう）と読むことが一般的ですが、黄色の葉と書いても黄葉（こうよう）と読みます。同じ読み方でも、紅葉の紅葉は、カエデなど赤く変化する葉をさし、黄色い葉の黄葉は、銀杏など黄色く変化する葉をさすようです。秋に色を変化させる木々の葉を楽しみにしている方がいる一方で、落ち葉掃除が大変な方もいることでしょう。視点を変えて見てみると、さまざまなものが違った目で見えてきます。

さて、カエデの紅葉は、「もみじ」とも読みます。「もみじ」で思い出すのは一人の禅僧、良寛さまです。一日中子供と遊ぶ良寛さまの話聞いたことがある方は多いでしょうが、生まれてから七十四歳で亡くなるまで、良寛さまは独自の視点で世の中を見通しました。

良寛さま病床のおり、貞心尼という尼僧さまと実の弟さんが付き添い、看病をしていました。貞心尼との和歌のやりとりが、禅僧が死に臨む句である辞世の句として伝わっています。

「いきしにの さかいはなれて すむ身にも さらぬ別れの あるぞかなしき」
生き死ににこだわらない出家の身であるけれども、避けることができない別れがあることが悲しい、と貞心尼が詠むと、

「裏を見せ 表を見せて 散るもみじ」と良寛さまが返したのです。

裏も表もすべてみせて、もみじが自然に散るように私も去って行く……。

この句は、自然に生きた いかにも良寛さまらしい辞世の句であると貞心尼はのちに残しています。

良寛さまは、自分の僧侶としての思いをたくさんの和歌や俳句などの作品に言葉として託されています。もみじに関する作品も多く残されていますので、せっかくの秋、紅葉を愛でながら、もみじに関する言葉を追い、良寛さまの生き方に触れてみても良いかもしれません。